慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アラビア語版『アリストテレスの神学』第七章
Sub Title	The Arabic version of "Theology of Aristotle", chap. 7
Author	岩見, 隆(Iwami, Takashi) 大川, 京(Okawa, Kyo) 木下, 雄介(Kinoshita, Yusuke) 高田, 康一(Takada, Koichi) 堀江, 聡(Horie, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.15 (2000. 5) ,p.92- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20000531-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アラビア語版『アリストテレスの神学』第七章

岩見　隆・大川　京・木下雄介
高田康一・堀江　聡　訳

はじめに

前回に引きつづき，『アリストテレスの神学』(Uthūlūjiyā Arisṭāṭālīs) をアラビア語原文から訳出する。この翻訳は1996年度から継続している慶應義塾大学言語文化研究所・共同研究（B）方式「イスラーム古典期哲学文献の研究」の成果の一部である。(1)

以下のアラビア語テクストを用い，底本には PA[1] を採用した。

'A. Badawī (ed.), *Aflūṭīn 'inda al-'Arab : Plotinus apud Arabes,* Cairo, 1955; 2nd ed., 1966.（略号 PA——初版と第二版を区別する場合は PA[1]，PA[2] とする）

Fr. Dieterici, *Die sogenannte Theologie des Aristoteles, aus arabischen Handschriften zum ersten Mal herausgegeben,* Leipzig, 1882.（略

(1) 既発表分は以下の通り。
第一章『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』第13号（1998, pp. 123–141.）
第二章『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第30号（1998, pp. 219–240.）
第三章『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』第14号（1999, pp. 55–69.）
第四章～第六章『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第31号（1999, pp. 115–154.）
なお，第二章の掲載誌には，堀江聡「アラビア語版『アリストテレスの神学』研究展望」(pp. 201–217) も発表されている。あわせて参照されたい。

号D）

以下のヨーロッパ語訳と『エンネアデス』のギリシア語テクストを参照した。

Fr. Dieterici, *Die sogenannte Theologie des Aristoteles, aus dem arabischen übersetzt und mit Anmerkungen versehen,* Leipzig, 1883.（ドイツ語訳）

Paul Henry et Hans-Rudolf Schwyzer (éd.), *Plotini Opera,* t. II : *Enneades* IV-V, *Plotiniana arabica ad codicum fidem anglice vertit Geoffrey Lewis,* Paris/Bruxelles, 1959.（英語訳および『エンネアデス』の原文）

Pseudo-Aristóteles, *Teología,* traducción del árabe, introducción y notas : Luciano Rubio, Madrid, 1978.（スペイン語訳）

段落分けは，原則としてPAおよびDのものを踏襲した。行頭に［56 : 04］のようにあるのは，PA^1の頁数と行の位置である。また『エンネアデス』との対応関係を本稿末尾の対照表にまとめたが，これはルイス訳に依拠している。

慈悲深く慈愛あまねき神の御名において

神学の書　第七章(2)

高貴なる魂について

[84 : 05] '我々は述べるが，高貴な主人たる魂は，己れの高次の世界を捨て，この低次の世界に降りてはきたが，それは己れの可能性と己れの高次の力に応じて，自分よりも後にある存在に形相を与え統御するためにしたことである。²この世界に形相を与え統御した後，この世界を離脱してすみやかに己れの世界に戻るなら，この世界への降下は少しも魂をそこなわず，かえって魂は降下から利益を得ることになる。というのも魂はかの事物(3)の認識をこの世界から獲得し，その本性が何であるかを知るからであるが，その前に魂は己れの諸力をこの世界にすっかり注ぎこみ，知性的な世界にいるときの魂にそなわっていた，もろもろの静止した高貴な働きと活動を目のあたりに見ている。(4) ³そこで，もし魂がその諸活動を顕わすことも，その諸力を注ぎこむこともなく，それらが眼に映じるようにもしていなかったなら，それら諸力および諸活動は，魂のなかにあって無為

(2) 本章は『エンネアデス』の第Ⅳ論集第八論文「魂の肉体への降下について」第五章～第八章に相当する。なお，原文には al-mīmar al-sābi' min kitāb uthūlūjiyā (wa-huwa al-qawl 'alā al-rubūbīyah) fī al-nafs al-sharīfah) とあり，この表題を逐語的に訳せば，『テオロギアの書（すなわち神学論）その第七章――高貴なる魂について』のようになる。

(3) 「かの事物」――原語は al-shay' であり，ディーテリチもルビオも「事物」としている。ルイスは『エンネアデス』に合わせて al-sharr と読んだのか，これを「悪 (evil)」と訳している。

にとどまり，魂は，堅固で見事な，もろもろの徳と活動を忘れているであろう，なにしろ，それらは隠れており顕在してはいないのであるから。[4]もしこれがこの通りであったなら，魂の力は認識されず，その高貴さも認識されない，つまり活動とは，隠れた力をその顕現によって知らしめすことにほかならない。もし魂の力が隠れていて顕われなければ，その力は衰滅し，まったく存在しなかったかのごとくになるであろう。

[84：15] [5]これがこの通りである証拠は被造物である，というのも被造物が美しく，輝かしく，彩りゆたかで見事な，眼に映じるものになると，それを眺めるのが聡明な者であれば，被造物の外面の装飾に驚くことなく，その内部を眺めてそれを創造し創出した者に驚く。疑いもなく，それを創った者は美と輝きのきわみにあり，その力には限りがない，なにしろその者は美とうるわしさと完全さに満ちた，かくのごとき活動を行なったのであるから。[6]もし創造主が——威なるかな，力なるかな——[85]諸事物を創出せずに，ただ独存しているだけであったなら，諸事物は隠れたままであり，その美しさも輝きも，顕らかな判然たるものにはなっていなかったであろう。もしこの一なる存在が，己れ自身のうちに立ちどまり，その力と活動と光を手放さずにいたなら，永続する諸存在に属するものも，変化する可滅的な諸存在に属するものも何ひとつ存在することなく，一者から創出された諸事物の多性もそれが現にあるようになることなく，またもろもろの原因がその結果を生みだすことも，その結果をして生成と諸存在に至る途を辿らせることもなかったであろう。[7]それゆえ，永続的なものも，生成と衰滅のもとに在る可滅的なものも存在していないのであれば，第一の一者は真の原因ではないことになる。その原因が真の原因であり，

---

(4)「目のあたりに見る」——第VI形動詞 tarā'at を他動詞と解する。PA の母音符号は「働きと活動」を主格にしているので，「知性的な世界にいるときの魂にそなわっていた，もろもろの静止した高貴な働きと活動が明らかに現われるのである」となるが，この場合，動詞 tarā'at は自動詞として機能していることになる。なお異読Ṣ（*Aya Sofya 2457*, Istanbul）には第I形の他動詞で ra'at（見る）とある。

真の光であり，真の善でありながら，諸事物が存在しないなどということが，どうしてありえよう。

[85 : 08] [8]したがって第一の一者がこのようであるなら，すなわち真の原因であるなら，その結果も真の結果であり，また第一の一者が真の光であるなら，その光を受けいれるものも真の受容者である。そしてそれが真の善であって，しかも善が溢出するものであるなら，溢出を受けるものもまた真理である。[9]それゆえ，これがこの通りであり，どうしても創造主が独存したままではいられず，その光を受けいれる高貴なもの，すなわち知性を創造せずにはいられないのであるなら，同様にして知性もまた，独存するばかりで，その活動と高貴な力と燦々たる光を受けいれるものを何も形づくらないままではいられず，そこで魂が形づくられる。[10]また同様にして，魂がかの知性的な高次世界に独存するばかりで，その諸刻印を受けいれるものが何もないというわけにはいかない。だからこそ魂は低次の世界に降りきたり，そのもろもろの活動とその気高い力が顕われるようにしたのである。これは，およそあらゆる本性にとって必然的なことであり，本性がその諸活動を行ない，己れの下にある事物に刻印を与えると，その事物は，己れのすぐ上方にあるものから作用をこうむり刻印を受けいれるようになる。つまり，より高いものがより低いものに刻印を与えるのであって，[11]いかなる知性的なものも，また自然的なものも，己れ自身のうちに立ちどまって活動の途を辿らずにいるなら，かならず，それは万物のなかでもっとも脆弱なものになってしまい，[86]その活動はほとんど目につかない。(5)

[86 : 01] [12]自然の諸事物が立ちどまっていて，活動(6)の途を辿らずにいるのが不可能であることの証拠は，土中に蒔かれる種子である。というのも種子は，あたかも物にあらざる霊的なもののように，広がりも重さもも

(5) PA はこのまま次の文につづいているが，D にならって，ここで段落を分ける。

(6) 「活動（al-fiʿl）」――異読「知性（al-ʿaql）」（H, Ṣ）。

たない一つの場として始まり，[13]たえず活動(7)の途を辿りつづけ，ついには己れ自身から脱け出る。つまり種子は己れの活動を行ない，己れの形相を形づくるが，その形相のなかに在って，種子は己れ自身に立ち帰り，いくたびも，その形相と同じようなものを作り(8)つづける。というのは，密着して離れない高次の能動的ロゴスが種子のなかにあるからであり，ただしそのロゴスは隠れていて我々の眼には映じない。[14]それで種子がその活動を行ない，我々の眼に映じるようになると，その大いなる驚くべき力が明らかになるが，その力は，どうしても，己れ自身のうちに立ちどまっているわけにも，生成と活動の途を辿らずにいるわけにもいかない。したがって当然のことながら，大いなる知性的諸事物は，どうしても，立ちどまったままその力と諸刻印を引きとどめ，それらを己れ自身のうちに封じこめているわけにはいかないのである。つねに活動(9)をつづけるなら，かならず，その諸刻印をかすかにしか受けいれられないものに行きつき，それが能動者の刻印をほとんど受けいれないために，別のものに刻印を与えることになる。

[86:12] [15]そこで，これがこの通りであるとして我々は述べるが，魂はその高貴な高次の力によって，(10)その力をこの世界全体に溢出するのであり，物的諸事物は，運動するものであろうとなかろうと，どれ一つとして，魂の力を欠いていたり，魂の善なる本性の外にあったりすることはない。各々すべての物が魂の力と善を，その力と善を受けいれる己れの力のかぎりにおいて獲得するのである。[16]そこで我々は述べるが，魂が刻印する最初の刻印，それを魂が質料のなかに刻印するのは，質料が感覚的諸事物のなかで最初のものであるからにほかならない。質料は感覚的諸事物の

(7)「活動（al-fi'l）」――異読「知性（al-'aql）」（Ḥ）。
(8)「その形相に似たものを……作り（yaf'ala mithla tilka al-ṣūrah）」――動詞 fa'ala（行なう，作用する）を，ここではとくに「作る」の意に解する。
(9)「活動（al-fi'l）」――異読「知性（al-'aql）」（Ḥ）。
(10) PA^1 と D の bi-qūwati-*hi* を，PA^2 により bi-qūwati-*hā* と訂正する。

なかで最初のものであるから，必然的にまず質料が魂から善を――善とはつまり形相のこと――獲得し，それから，感覚的諸事物の一つひとつが，善を受けいれる己れの力に応じて，その善を獲得することになる。

[86 : 19] [17]また我々は述べるが，質料が魂から形相を受けいれると，自然が生じ，すると魂は否応もなく，その自然に形相を与え，[87]自然が生成を受けいれるようにする。自然が生成を受けいれるようになるのは，もっぱら，自然のなかにもたらされた魂的な力と高次の諸原因のためである。[18]そして知性の活動は，自然すなわち生成の端緒において立ちどまる。したがって生成は，形相を与える知性的な諸原因の最後であるとともに，生成をもたらす諸原因の最初でもあるのであり，諸実体に形相を与える能動的諸原因が，自然に行きつく前に立ちどまるのであってはならない。[19]これがこの通りであるのは，もっぱら第一原因ゆえのことであり，第一原因は，知性的な諸存在を，生成と衰滅のもとに在る偶有的な諸形相に形相を与える能動的な原因にするのである。[20]ところで感覚的な世界は，知性的な世界とそこにある知性的な諸実体のしるしであるにすぎず，それら知性的な諸実体の大いなる諸力と気高い徳，そして沸きかえり泡立つその善を明示するものにすぎない。

[87 : 08] [21]また我々は述べるが，知性的な諸事物は感覚的な諸事物に結びついているが，第一創造主は，知性的諸事物にも感覚的諸事物にも結びついてはいない，かえって第一創造主は一切の事物を把持する者なのである。ただし，知性的な諸事物が，第一の存在から媒介なしに創出されるがゆえに隠れた存在であるのに対して，感覚的な諸事物は，隠れた諸存在の摸像であり似姿であるがゆえに可滅的な存在であり，その感覚的な諸事物が生成と生殖によって存立し持続するのは，もっぱら，確固とした永続的な知性的諸事物の摸倣として残存し存続するためにすることなのである。

[87 : 13] [22]また我々は述べるが，本性には，知性的なものと感覚的なものの二種類がある。ところで魂は，知性的な世界にあるときは卓越した高貴なものであるが，低次の世界にあるときは，魂が入りこんだその身体

〔物体〕のために，卑しく劣ったものになる。[23]知性的なものであり知性的な世界に属してはいても，魂はどうしても感覚的な世界から何らかのものを獲得し，そこに入りこんでしまう，というのも魂の本性は，知性的な世界と感覚的な世界の両方に結びついているからである。[24]それゆえ，知性的な世界を捨ててこの世界にあるからといって，魂が批難され，咎められてはならない，なぜなら魂はその二つの世界のまさしく中間に置かれているからである。[25]魂がこのような状態になったのは，たとえ高貴で神的なあれら諸実体に属してはいても，魂がそれら諸実体のなかの最後のものであり，しかも自然的感覚的な諸実体の最初のものでもあるからにほかならない[88]。したがって魂は，自然的感覚的な世界の間近に来ると，どうしても，己れの諸徳をこの世界に放出し，それらをこの世界に溢出せずにはいられない。[26]それゆえ魂の諸力がこの世界に溢出して，この世界を究極の装飾で飾りたてることになるが，往々にして魂はこの世界の卑賤さを獲得してしまう。そうならないためには，警戒を怠ることなく，この世界の低劣な批難さるべき諸状態がいささかたりとも混入してこないように用心しなければならない。

[88:05] [27]また我々は述べるが，魂は，否応もなくその諸力をこの感覚的な世界に溢出し，この世界を飾らずにはいられなくなると，この世界の外面を飾るだけでは足りずにその内部に現われ，諸力およびもろもろの能動的ロゴスを刻印するが，それらのものは諸事物の認識をもとめる人が途方に暮れるような，言葉では描きつくせないものである。[28]これがこの通りであること，すなわち諸物の外面より，むしろその内部を魂が飾ることの証拠は，魂が諸物の外面ではなくその内部に宿ることである。これを確証するのは，もっぱら魂が外からではなく内側からその諸活動を顕わすことであり，つまり，しばしば我々が目にするように，植物にせよ，他の生長する生物にせよ，外面には美も輝きもないのに，その内側からは，たちまちにして，美しく輝かしい色彩が，芳しい香りが，驚くべき果実が現われ出るのである。[29]したがって，もし魂が自然の諸物のなかに入りこみ，

それら諸物に，多くの活動を行なう驚くべき諸刻印を――すなわち本性を――つねに刻印しつづけるのでないならば，その物はすみやかに滅び消え去り，現にそうあるように存続し実をむすびはしないであろう。[30]つまり魂は，物体の輝きを見て，それを飾り，そのなかに本性を刻印すると，(11)己れの高貴な諸力をその物体に溢出してもろもろの能動的ロゴスを物体のなかに入りこませ，その能動的ロゴスに驚くべき活動を行なわせるのであり，それが眺める者の注意を惹くのである。

[88:17] [31]また我々は述べるが，魂は，たとえ物のなかに入りこんではいても，その物から脱けだし，その物を後にして己れの知性的な高次世界に赴き，二つの世界を比較することはできる。それで二つの世界とそのもろもろの美点を比較するなら，(12) 魂はかの世界の卓越性を経験によって知るわけであるから，もろもろの高貴な高次の美点とかの世界のこの世界に対する優越性を正しく認識するようになる。[32]つまり魂が，脆弱な本性でありながらも，[89]かの事物を経験し，経験によってそれを認識するなら，それもまた魂の善の認識を知識と明証性において増大させることの一つなのであって，経験ではなく知識だけによってかの事物を知るよりも，その方がよいことなのである。(13)

---

(11) PAとDのwa-dhālika anna al-nafs lammā ra'at bahā' al-jism wa-*zīnah*-hu wa-*athar* al-ṭabī'ah fī-hi（魂は，物体の輝き，その装飾，そのなかにある本性を見ると）を，wa-*zayyanat*-hu wa-*aththarat* のように読む。

(12) 「比較する（こと）」――原文の第II形動詞 qarrana とその動名詞 taqrīn を，とりあえず第III形 qārana と同様の意味に解しておく。なお，ルイスは「集める，合わせる（set together）」と訳している。

(13) 「かの事物」――原語は al-shay'。ルイスは異読Sによって「悪（evil）」と訳している。バダウィー版の校註に見られるこの異読は，かなり文が乱れているが，おおむね次のように読める。「つまり世界［知る者］が脆弱な本性であっても，人が悪を経験し，経験によってそれを認識するなら，それもまたその人の善の認識を知識と明証性において増大させることの一つなのであって，経験ではなく知識だけによって悪を知るよりも，その方がよいのである（idhā kāna al-'ālam [al-'ālim?] ḍa'īf al-ṭabī'ah fa-man jarraba al-sharr

[89:03] 33また我々は述べるが，知性は，己れのなかにある完全な力(14)と溢出する光のために，己れ自身のうちに立ちどまってはいられずに，どうしても運動して上方あるいは下方に赴くことになるが，上方へ赴いて己れの上にあるものにその光を溢出することはできない，というのは知性の上に，その光を溢出してやるような被造物は一つもないからであり，それはまた知性の上にあるのが，他ならぬ第一創造者であるからである。それゆえ知性は，第一創造者が知性のなかに据えた不可避の法則によって下方へ赴き，ついに魂に行きつくまで，その光と力を己れの下にある諸事物に溢出しつづけるが，さて魂に行きつくと知性は立ちどまり，魂を越えて行きはしない，というのも魂は，我々が幾度も述べたように，知性的な世界の最後のものなのである。(15) 34それで知性は，この世界に降下してついに魂のところに赴き，それが刻印するところのものを魂に刻印すると，諸活動の一切を魂にゆだねてふたたび帰還するが，上方に昇ってついに第一原因に到達すると，35そこで立ちどまり，下方へは降下しない，というのも知性は，そこに滞在し，それに――すなわち第一原因に――結びついている方が，より優れており，光や力およびその他の諸徳から受ける利益がより多いことを，(16) 経験的に知っているからである。(17)

---

wa-'alima-hu bi-l-tajribah, fa-inna dhālika mimmā yazīdu-hu bi-ma'rifah al-khayr 'ilman wa-bayānan min an yakūna ya'lama al-sharr 'ilman faqaṭṭ lā bi-l-tajribah)」。なお本章§2を参照。

(14) 「完全な力（al-qūwah al-tāmmah)」――異読「確固とした力（al-qūwah al-thābitah)」(Ḥ, Ṣ)。

(15) PA と D はここで改行して段落を分けている。訳文にはうまく反映させることができなかったが，原文の文章構成は，§33 冒頭の wa-naqūl: kamā anna al-'aql...（また我々は述べるが，ちょうど知性が……であるように）から§35の末尾に至る部分の記述を受けて，§36 の ka-dhālika al-nafs...（それと同じように魂は……）以下が述べられるという形になっている。そこで，§33-38 については，PA および D における段落の切れ目（§33 / §34-38）を移動させ，§33-35 と§36-38 に分ける。

(16) 「より優れており，光や力およびその他の諸徳から受ける利益がより多い」――原語は afḍal wa-akthar fā'idatan min al-nūr wa-l-qūwah wa-sā'ir

[89 : 12] [36]それと同じように，魂もまた，光や力およびその他の諸徳に満たされると，己れ自身のうちに立ちどまったままではいられないが，その原因は，魂のなかのそれら諸徳が，魂をして活動を欲求せしめるからである。[37]すると魂は，上方へは赴かずに下方へ赴く，というのも知性は，魂の諸徳の原因であるから，魂の諸徳は何ひとつ必要としない。魂は上方へは赴けないので下方へ赴き，己れの光およびその他の諸徳を，己れの下にあるすべてのものに溢出し，この世界を光と美と輝きで満たす。[38]そこで魂は，それが刻印するところのものをこの感覚的な世界に刻印すると，後戻りして己れの知性的な世界に帰り，知性的な世界にしがみつき結びつき，知性的な世界が感覚的な世界よりも気高く高貴であることを，まったく疑念をともなわない知によって知り，いつまでも知性的な世界を眺めつづけるのであり，この世界に帰りたいとはけっして思わない。

[90 : 01] [39]また我々は述べるが，魂はこれらの劣った感覚的事物のなかに入ると，力の弱い，光の乏しい諸事物に行きつく。つまり，この世界で活動し，この世界に驚くべき諸刻印を刻印すると，魂は，その諸刻印を手放して速やかに消滅させてしまってはならないと思う，というのも，それら諸刻印は画像であり，画像というものは，描き手が生成(18)を供給してやらなければ，消え失せ，滅び，掻き消えてしまうが，それでは画像のうるわしさは明らかにならず，無意味になり，また描き手の叡智と力も明白にはならない。[40]それで，これがこの通りであり，他ならぬ魂がこういう驚くべき刻印をこの世界に刻印するのであるから，魂はこれらの刻印が存続するようにつとめているのである。つまり魂は，己れの世界に戻ってそのなかに入ると，かの輝きと光と力を視つめ，その光とその力を獲得して

---

al-faḍā'il だが，ルイスはこれを「光や力およびその他の諸徳よりも優れており，有益である（better and more advantageous...）」と訳している。

(17) 前註 15 に述べた理由により，PA および D とは異なる段落分けを行なう。

(18) 「生成（al-kawn）」――これをルイスとルビオは alwān と読んでいらしく，「色彩」と訳している。

この世界に投じ，そこに光と生命と力を供給する。これが魂のあり方であり，このようにして魂はこの世界のあり方を統御し，この世界に結びついているのである。

[90:09] [41]我々は，このことにかんする我々の見解を説明し，それを確証し報告したい。そこで我々は述べるが，魂は，この感覚的な低次の世界にすっかり降下してしまうことはない，全体的な魂も我々の魂もそうはならず，魂に属する何かが知性的な世界を去らずにそこに残っている，というのも事物は，それが滅びて己れ自身の外に出てゆくのでなければ，己れの世界から完全に去ることはありえない。したがって魂は，たとえこの世界に降下しても，己れの世界に結びついているのであって，なぜなら魂には，かしこにいながら，この世界からいなくなってもいない，ということがありうるのである。

[90:14] [42]そこで誰かがこう言ったとする。それではなぜ我々は，この世界を感じとるように，かの世界を感じとりはしないのか。——我々はこう述べるとしよう。それは感覚的な世界が我々を圧倒し，我々の魂がこの世界の批難さるべき(19)欲望に満たされ，我々の耳が，この世界にある夥しい喧騒と叫喚に満たされているからであり，おかげで我々は，かの知性的な世界を感じとることも，魂がかの世界から我々にもたらすものを知ることもないのである。[43]我々が，知性的な世界と魂がその世界から我々にもたらすものを感じることができるのは，我々がこの世界の上に昇ってこの世界の低劣な欲望を捨て去り，この世界の諸状態のいかなるものにもかかずらわずにいる，そういうときでしかない。[44]それで我々は，かの世界とかの世界から我々の上に降下してくるものを，魂を介して感じることができるのであるが[91]，魂のどこかの部分に存するものを，それが魂全体に行きわたる前に感じることはできない。これは欲望がそうであるのと同

(19) 「批難さるべき」——PA[1]のal-ma*d*mūmahを，DとPA[2]によりal-ma*dh*mūmahに訂正する。

じことであり，というのも我々は，欲望が魂の欲望的な力のなかに確固としてとどまっているかぎり，欲望を感じることができないが，それが感覚的な力や思考および思念の力のもとに赴くとその欲望を感じとる，ところが，この二つの力のなかにそれが入ってくる前は，たとえそこに久しくとどまっていても，その欲望を我々は感じとらずにいるのである。

[91:05] [45]また我々は述べるが，およそあらゆる魂に，下方において物に繋がり，上方においては知性に繋がる何かがそなわっている。[46]全体的な魂は，その力の一部によって，何の苦労も努力もなしに全体的な物を統御しており，というのも，それを全体的な魂は，我々の魂が我々の肉体を統御するように思考によって統御するのではなく，もっぱら全体的知性的に統御するのであって，思考も熟慮もしてはいない。[47]全体的な魂がそれを熟慮によることなく統御するようになるのは，それが全体的な物であって，そこにいかなる多様性も含まれてはおらず，その部分がその全体に類似しているからにほかならない。全体的な魂は，多様な混合体を統御しているのではなく，また類同的ではないために多様な統御を要する諸器官を統御しているのでもない。全体的な物は，連続的で，諸器官の類同的な一つの物であり，そこにいかなる多様性も含まれない一つの本性なのである。[48]一方，これらの個別的な肉体のなかにある個別的な魂は，これもまた高貴なものであり，高貴な統御によって肉体を統御するが，ただしもっぱら苦労し努力しながら肉体を統御しているのである，というのも個別的な魂はもっぱら思考と熟慮によって肉体を統御しているのであるから。その個別的な魂が熟慮し思考するようになるのは，感覚が，魂をして感覚的な諸事物を眺めることにかかずらわせ，また感覚が魂にもたらす本性から外れた諸事物によって，苦痛や悲歎を魂のなかに入りこませるからにほかならない。[49]するとこれらの事物が，魂を無頓着にし空想にふけらせ，魂を妨げて，その視線を己れ自身に，知性的な世界に残存する己れの一部分に投げかけることができないようにする。つまり，批難さるべき欲望や低劣な快楽のような，低劣な物事が魂を圧倒しているのである。魂は己れの永続

的な事柄を捨て去り，それらを捨てることによってこの感覚的な世界のもろもろの快楽を獲得しようとするが，その魂は，真の快楽であるあの快楽から自分が遠ざかっていることを知らずにいる，というのも魂は，存続も恒常性もまったくもたない可滅的な快楽のもとに赴いているからである。°そこでもし魂に，感覚と可滅的な感覚的諸事物を捨て去ることが可能であり，魂がそれら諸事物にしがみついていなかったなら，魂はこの肉体を，いともたやすく，苦労も努力もなしに統御し，全体的な魂に己れを似せ，全体的な魂と同じように振る舞い統御するようになるのであり，その両者のあいだに懸隔も対立もありはしないのである。

いと高き神の助力により第七章完了する

『神学の書』／『エンネアデス』 対照表[20]

1 : 5, *24–27*	2 : 5, *27–31*	3 : 5, *31–33*	4 : 5, *32–35*
5 : 5, *35–37*	6 : 6, *1–5*	7 : ϕ	8 : ϕ
9 : ϕ	10 : 6, *6–8*	11 : ϕ	12 : 6, *8–9*
13 : 6, *9–10*	14 : 6, *11–14*	15 : 6, *14–18*	16 : 6, *18–20*
17 : ϕ	18 : ϕ	19 : ϕ	20 : 6, *23–25*
21 : 6, *25–28*	22 : 7, *1–2*	23 : 7, *3–4*	24 : 7, *4–6*
25 : 7, *6–8*	26 : 7, *8–9*	27 : 7, *10*	28 : ϕ
29 : ϕ	30 : ϕ	31 : 7, *11–14*	32 : 7, *15–17*
33 : 7, *17–18*	34 : 7, *21–22*	35 : ϕ	36 : 7, *23*
37 : ϕ	38 : 7, *26–28*	39 : ϕ	40 : ϕ
41 : 8, *1–3*	42 : 8, *3–6*	43 : 8, *6*	44 : 8, *6–11*
45 : 8, *11–13*	46 : 8, *13–15*	47 : ϕ	48 : 8, *16–20*
49 : 8, *22*	50 : 8, *22–23*		

---

[20] たとえば最初の 1 : 5, *24–27* は，第七章の§1が，おおむね，『エンネアデス』第Ⅳ論集第八論文第五章の 24 行目から 27 行目に対応することを示す。